

東アジア四千年の永続農業

中国・朝鮮・日本 (上) (下)

F. H. King 著／杉本俊朗(横浜国立大学名誉教授) 訳

復刊版への訳者あとがき

私がキングの本書の存在を知ったのは、ウィットフォーゲル (K. A. Wittfogel) の *Wirtschaft und Gesellschaft Chinas*, 1931. と羽仁五郎の『史学雑誌』連載論文「東洋に於ける資本主義の形成」(一九三二年) とに引用されていたからである。それは一九三三、四年当時、武蔵高校三年生の頃であった。ドイツ語の国松孝二先生の学年末の試験問題に中国経済史の一齣らしき文章のなかに *Produktionsverhältnisse* とか *Produktionsweise* などが出てくるので、当時評判になっていたウィットフォーゲルが出所であろうと、試験後先生に聞いたらびっくりされていた。平野義太郎訳は一九三三年末に出たので、先生は出題を思いつかれたらしい。もちろん、高校生だった私が当時すぐにキングの業績の意味を深く理解したわけではなかった。

ちょうどこの頃、一九三三年の夏休みに御茶の水科学ゼミナール、いまなら市民講座とでもいうであろう催しがあった。講師は三枝博音、戸坂潤、岡邦雄、羽仁五郎、野原四郎、杉本栄一、河西太一郎、石浜知行、佐々弘雄、安田徳太郎といった顔触れで、羽仁さんにはランケ批判のドイツ語論文をテキストに教わった。これをきっかけに東大に進学してから私の姉妹が自由学園で五郎さん(うちではこう呼んでいた。彼自身も発禁になった『歴史学批判序説』、一九三二年、鉄塔書院の検印に G o r o というハンコを使っていた)の生徒であった関係もあって、学園移転先の武蔵野鉄道田無町駅(いまの西武池袋線ひばりヶ丘駅)近くの南沢にあった五郎さんの自宅を何度か訪問して教えを請うた。前掲の史学雑誌の論文は当時学界の話題になっており、私も四回の連載論文を製本して熟読して、五郎さんにこの論文について質問しているうちにキングが話題になり、彼がキングの一九二六年ロンドン版(ジョナサン・ケイプ発行)を貸してくれて、はじめて私はキングの原本に接したわけである。ウィットフォーゲルもこの版を使っており、当時すでに一九一一年のキング未亡人の刊本は稀少となっていたのであろう。ただこのロンドン版は多少の省略もあり、図版が不鮮明である。戦後のロデール版(一九七三年)、ゴードン版(一九七八年)、ドウヴァ版(二〇〇四年)は元版通りであるが、最後のドウヴァ版は副題の *Permanent Agriculture* を断りもせず現代風に *Organic Farming* に変えている。こんなわけで、キングについては少しは知識があった。卒業後は東洋経済新報の記者となり、会社や商品の

近況を投資家などに伝える記事を書きながら、学生時代に引きつづいて中国の近現代経済史に関心を寄せていたが、満鉄調査部が設立した東亜研究叢書刊行会の叢書第二巻太平洋問題調査会編『中国農村問題』（Agrarian China. Selected Source Materials from Chinese Authors. Compiled and Translated by the Research Staff of the Secretariat, Institute of Pacific Relations, 1938, Shanghai, Kelly & Walsh; 1939, London, Allen & Unwin. 一九四〇年、岩波書店）の翻訳を依頼され、そのさい原著者たる中国人研究者の来歴や民国成立後の中国農業の調査研究を調べて、訳者跋にまとめ、さらに訳語用例や度量衡、貨幣単位、地図など原著にないものを付け加えた。このことが本書の「訳者序文」（上巻2ページ。以下、旧訳序）につながるのである。そこにある如く、キングはわが国の農業研究者に注目されていて、満鉄調査部の天野元之助さんなども訳出を勧めていたようで、同部の三輪武さんが中途まで手掛けておられた。この企画は当時中国関係の専門出版社生活社のものであったが、他方三田の古書店兼出版社慶應書房もキングをとり上げた。ここで豊田四郎君が登場する。当時の検閲制度、治安維持法のため旧訳序で書けなかった事情をここに書き残しておく。

私是一九四〇年九月、記者の京城支局配転問題をきっかけに東洋経済新報社主幹石橋湛山と社是（大正初期以来の小国主義、つまり反帝国主義あるいは例のプチ帝国主義）の解釈をめぐる齟齬を生じ、同僚四名とともに連袂辞職した。その仲間の一人慶應出の遊部久蔵君とは意気投合だったので、二人で少し勉強しようということになったら、彼が少し同学後輩の豊田四郎君を紹介してくれて、三人でRS（読書会）を豊田君の自宅でやることになった。彼の父はたしか日産化学の幹部で、自宅は洗足池（東京・大田区）の近くで、スペースにゆとりがあった。当時自宅でもRSをやるのは危険視され、特高に狙われないように用心しなければならなかった。当時豊田君は藤林敬三慶應義塾大学教授の助手であり、技術論を専攻中で、すでに『三田学会雑誌』にテヒノロジーの概念やら系譜について論文を書いており、かのハーバード・フーヴァー元大統領の英訳アグリコラの『デ・メタリカ』を座右に置き、また農業技術ではキングに目をつけていた。慶應の図書館はキングの元版を所蔵（分類登録E2-98-1）しており、彼はこれを借り出して、後輩の学生三人に分担翻訳させ、彼らの溜り場でもあった慶應書房が出版を引き受けることになっていた。その間、遊部、杉本、豊田の三人はリチャード・ジョーンズの地代論を勉強しようと豊田宅につどった。農業問題専門の小池基之助教授にも呼びかけたが、都合がつかなかったか用心してか、小池さんは参加しなかった。あとの話になるが、ジョーンズを三人で分担訳をはじめ、私が旧知の日本評論社の美作太郎と森三男吉に交渉し、出版を引き受けてもらった。これで目途がついたと作業を進めているうちに、当時有沢広巳先生といっしょに東芝の囑託になっていた鈴木鴻一郎さんもジョーンズの訳稿を日評へ持ち込んだ。鈴木さんは大内兵衛ゼミの先輩で卒業後もゼミに参加していたのでよく知っていた。彼が私に申し入れてきたので、東芝の前、数寄屋橋際のローマイヤーで四人が相談し、結局私と豊田の訳稿を鈴木に提供し、遊部はそのまま自分の分担をやりとげ、私と豊田は手を引き、一九四二年

に私が留置場に入っている間に鈴木、遊部共訳の形で本になったのである。ところが戦後になって鈴木さんは共訳者の遊部君に相談もせず、岩波文庫に持ち込んで単独訳にしたのである。

キングに戻って、豊田君が采配を振った学生三人の訳文は誰も検討することなく組版にまわされ、初校刷が出てきたのがわれわれ三人がRSを始めたころで、私がさきほどくたぐだ記した『中国農村問題』の訳出の実績があるから見てくれと豊田君に頼まれた。キングについては前述のように関心があったし、無職で暇だったので、校正刷を読んでから、旧訳序にあるようないきさつで、一九四〇年末から四二年春までかけて私が全面改訳して本文は校了になったところ、一九四二年四月私が治安維持法で検挙され、写真、図版などは手つかずで中断、同年末起訴猶予で釈放されて思想犯保護観察法で保護司を指定されたら、こんどは慶應書房の岩崎徹太さんが検挙され、書店自体の廃業を強制され、仕掛品は取次大手の栗田の出版部が引き受けたのである。栗田は大原社会問題研究所の出版物を引き受けており、また昭和一ケタ期の左翼出版社の永田書房をやっていた永田周作さんが出版部長で、昔の仲間の翻訳専業者高山洋吉さんが同部に食客として厄介になっていた。

豊田君も岩崎と前後して一九四三年九月に検挙されたが、戦争終結とともに大学に復帰し、塾の先輩野呂榮太郎の遺業を継ぐべく日本経済機構研究所という共同研究体を組織した。のち教職を去って日本共産党の理論家として多彩な活動を展開し、四年前に九〇歳で亡くなった。私は朝鮮戦争勃発をきっかけに東京から再疎開もどきに片瀬海岸（神奈川県藤沢市）に転居、職場も横浜に所在したので豊田君とは疎遠になったが、彼の晩年に何十年ぶりかで新日本出版社版『資本論』出版記念会で会ったものの、もっとゆっくり対で感慨を述べ合いたかった。彼が発案したキングの邦訳がこういう形で再生して、彼もまた瞑すべしだろう。

遊部君はわれわれのRSが一九四一年初めに解消した前後に東亜研究所に職場を得て、中国の工業や労資関係の調査に従っていたが、戦後東研は解散、政治経済研究所に改組されるに伴い、人員整理が行なわれ、しばらくして遊部君は母校慶應義塾大学経済学部を迎えられ、すぐれた業績を残しつつ、定年前の六三歳という若さで亡くなったのは、惜しみても余りあることであった。

旧訳序の末尾にあるように、上梓に当たっては石黒忠篤、大内兵衛、東畑精一先生ら——「解説」で久馬一剛さんのいわれる「当時の日本の知性を代表する人たち」——のお世話になった。編集部がその辺のいきさつも書き残してはどうかというので、六五年前を想起してみよう。

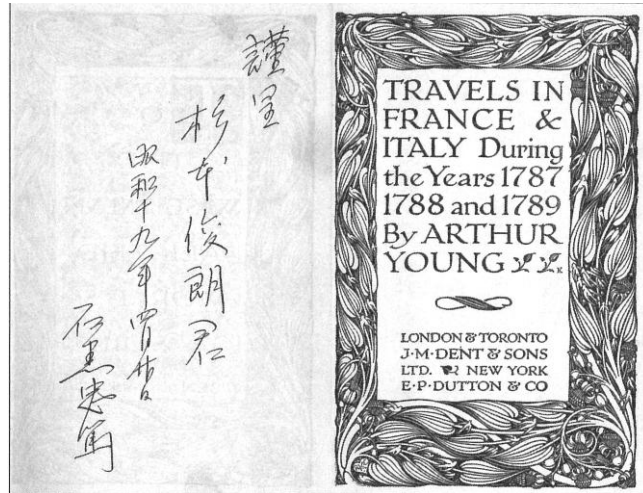
恩師大内兵衛先生については、私は、先生の御指名により『現代随想全集8』（創元社）、『昭和文学全集37』（角川書店）、『大内兵衛著作集12』（岩波書店）に三回も解説を書いている。そこには先生とのふれあいが述べられているので、ここでは繰り返さない。一九四二年暮に起訴猶予となって釈放された私は、すぐに先生のお宅にご挨拶に参上した。保釈中の先生は、私が勾留中にわざわざ拙宅を訪れ、両親にお見舞いのことばを下さったから

である。そのときこれから何をやるかが話題になり、私が中断されたキングの訳業のことを先生に伝え、キングが農商務省で石黒忠篤さんに会ったこと、その模様を知りたいと先生に言ったらしい。石黒さんはたしか明治四十一年の東大卒、高文合格で入省し、大内先生は大正二年卒、大蔵省に入っているの、五年くらいの差があるが、執務上のつき合いがあったらしく、先生は私の要望を受けてキング来朝時の事情につき石黒さんに聞いて下さったと思う。またこのとき先生の令息力さんが繰上げ卒業したが、無職であり、農業を勉強したいという話を聞いた。私は東洋経済在職中に日満農政研究会にいた川俣浩太郎さんと交流していたが、彼が石黒さんがつくった東亜農業研究所に移っていたので、力さんの職場に向いていると思い、先生とも相談し、川俣さんに会って所長の石黒さんに話が通じたのではなかったかと思う。この辺は記憶があやふやで、前後関係も頼りない。キングの案内役をつとめた川口順次郎さんの経歴は戦前の学士会名簿で明治三十七年北大農経卒ということがわかったが、おそらく高文は受けていなくて、年下の石黒さんの部下だったのではないかと推測している。農林水産省には人事記録は残っていないのであろうか。

東畑先生の『日本農業の展開過程』は私が学生るとき改造社の系列の東洋出版社の『基礎経済学全集』の一冊として刊行されたのに、一年もたたないのに増訂版が岩波書店から出たので、不思議だなと思った。大いに魅力のある著作であったが、学生時代の私には既刊の近藤康男先生の『農業経済論』の方が身近に感ぜられた。この本も初版（一九三二年）が浅野書店で出版され、一九三四年に時潮社発行に変わったので、農業書の出版には共通の何かがあるのかなと思った。

東畑先生は留学のさい、ウィスコンシン大学のテイラー教授についてと伝聞していて、一九一〇年代には猪俣津南雄さんもテイラーのもとで学んだと何かで知っていたが、二人とも秀才としてテイラーに評価されたそうである。キングについて東畑先生もウィスコンシン大学で何か知見を得られたかと研究室をおとずれ、旧訳序に掲げた合衆国農務省の農事試験場報告を先生から拝借した次第である。その後ながらお目にかかる機会もなかったが、思い出すのは、先生がアジア経済研究所長に在任中に、私が会長をしていた経済資料協会の総会がアジ研で開催されたさい、久しぶりに歓談を重ねたことである。

いまから思えば、先生とはとくに古書探求についてもっと話し合っておけば楽しかったであろう。石黒さんとは東京・浜田山の東亜農業研究所でお目にかかったような気もするが、あるいはもっと前に大手町のバラック時代の農林省で和田博雄さんと同席でお会いしたような気もする。序でながら和田さんが米政課長のときに、戦争の拡大に伴う食糧問題の対策のため、カーネギー財団による第一次大戦の社会経済史の一冊、Skalweit : Deutsche Kriegsernahrungswirtschaftの翻訳を依頼され、役所の執務資料にというので大急ぎで作業したことがある。訳稿は和田さんに手渡して会計課で翻訳料を日銀払い政府小切手でもらった。和田さんはそのうち企画院に出向し、例の事件に連座し、スカルワイトが農林省で印刷されたかどうか不明になってしまった。訳稿はゴミとして処分されたか、書庫の片隅に残っているのか、まだ気になっている。



キングの訳本が出来上がったとき石黒さんにお届けしたら、お返しにアーサー・ヤングの『フランス、イタリア紀行』を贈って下さった。これがいま手元に残っているヘリテッジで、上図がそのプリントである。

片瀬西浜にて
二〇〇八年十二月十九日